教育研究業績書

2025年05月07日

所属： 心理学科　　資格： 教授　　氏名： 安藤　明人

研究分野	研究内容のキーワード
社会心理学	経済的社会化、行動経済学、社会性の発達
学位	最終学歴
文学修士,修士（経済学）	大阪大学大学院 人間科学研究科 博士課程 単位取得済退学

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
1 教育方法の実践例		
2 作成した教科書、教材		
1.心理学英和・和英基本用語集	2010年04月	心理学の英語基本文献を読む際に必要となる基本用語を集めたもの。
2.社会心理学(改訂版)	2006年04月	書き込み式のサブノートとして使用できる『社会心理学』の改定を行い，社会認知心理学概論，社会認知心理学特論の講義で使用した。
3.社会心理学　第2版	2004年04月	講義内容に即した内容を精選し，かつ見開きの右ページを白紙とし，サブノートとして使えるように工夫した。
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
4 その他		

職務上の実績に関する事項

事項	年月日	概要
1 資格、免許		
1.修士（経済学）（神戸大学）	2007年03月	
2 特許等		
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
4 その他		

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
1 著書				
1.児童心理学・発達科学ハンドブック　4巻　生態学的情況と過程	共	2022年8月	福村出版	分担執筆　第５章　仲間集団における子ども（翻訳）pp.262-332
2.社会・文化に生きる人間　発達科学ハンドブック５	共	2012年3月14日	新曜社	分担：「経済・社会の仕組みに関する理解（第14章）」，pp.170-180. 執筆者：氏家達夫，遠藤利彦，篠原郁子，松本学，野村晴夫，庄司順一，服部敬子，藤田文，谷口弘一，駒谷真美，南博文，木下孝司，首藤敏元，安藤明人，二宮克美，戸田有一，坂上裕子，久保ゆかり，中尾達馬，金政祐司，上淵寿，小松孝至，平井美佳，杉村和美，安達智子，徳田治子，伊藤裕子
3.心理学英和・和英基本用語集	共	2010年03月	福村出版	小花和Wright尚子，安藤明人，佐方哲彦
4.経済心理学のすすめ	共	2007年12月5日	有斐閣	分担：「高校生・大学生のための経済学教育」（第11章，pp.239-264） 坂上貴之，竹村和久，楠見孝，西村直子，渡辺隆裕，加藤高明・岡田克彦，西村和雄・外池光雄・飛泳芳一，西村周三，菊池聡，子安増夫，安藤明人，藤村宣之 金融リテラシーの教育が求められるようになった現代における，高校生･大学生を対象にした経済学教育の必要性について述べたもの。
5.健康のための心理学	共	2006年04月1日	小林芳郎編，保育出版社	分担：「観察によるアセスメント」(pp.121-125)，「心理検査によるアセスメント」(pp.129-135)

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
1 著書				
				主として健康心理学の分野で用いられる心理査定（アセスメント）に関して，観察によるアセスメントと心理検査によるアセスメントについて，その目的，種類，実施方法等について総説的に解説した。
6.新・心理学の基礎知識	共	2005年01月10日	中島義明，繁枡算男，箱田裕司編，有斐閣	分担:「動機づけ研究の歴史」(pp.260-261)，「コントロール概念」(p.269). 動機づけ研究の歴史」と「コントロール概念」について解説を加えた。
7.発達健康心理学	共	2002年12月20日	萱村俊哉編，ナカニシヤ出版	萱村・小山・戸部・川端・白瀧・安藤・上野・萱村・後藤・田辺・小寺 分担：「社会的スキルの発達健康」(pp.121-137) 社会的スキルの概念、社会的スキルの発達、社会的スキル・トレーニングの技法、ライフスキルと健康教育について紹介を行なった。全（pp.243）
8.攻撃性の行動科学：健康編	共	2002年06月	島井哲志・山崎勝之（編），ナカニシヤ出版	島井・安藤・大渕・宇津木・曽我・大平・松見・西・大竹・大芦・福西・小野寺・佐々木・石原・山崎 分担：「攻撃性概念と測定方法」(pp.35-51) 攻撃性に関する内外の諸概念を整理し、各構成概念に基づく攻撃性の測定法について紹介した。全（pp.270）
9.社会性の比較発達心理学	共	2001年04月	岡野恒也監修　牧野順四郎・南徹弘・小山高正・田中みどり・加藤克紀（編），アートアンドブレイン	南徹弘・牧野順四郎・武田庄平・加藤克紀・小山高正・安念保昌・小田亮・板倉昭二・平田聡・田中みどり・近藤清美・根ヶ山光一・安藤明人・金澤忠博・江木明美 分担:「仲間関係の発達と適応」(pp.189-204). 乳幼児期から児童期にかけての仲間関係のあり方が、子どもの発達やその後の社会的適応にどのような影響を及ぼすかについて、内外の研究を総覧して検討した。
10.人間関係を学ぶ心理学	共	1999年03月	福村出版	分担：「人間関係の始まり」(pp.75-98)，「人間関係の展開」(pp.99-119) 杉野欽吾・亀島信也・安藤明人・小牧一裕・川端啓之 人間関係を学ぶ学生向けに書かれた心理学の入門書。(186p.)
11.サルとヒトのエソロジー	共	1998年03月27日	糸魚川直佑・南徹弘編，培風館	分担：「社会的グルーミングの構造と機能」(pp.1-16) 社会的エソロジーの立場から、霊長類集団における社会的グルーミングの構造と機能について概観し、その上で、野生ニホンザル集団において観察された社会的グルーミングの分析を行った。ここでは特に、血縁関係のない雌間で観察されたグルーミングの分析に基づいて導き出されたグルーミング関係とグルーミング・ネットワークを検討することにより、それが血縁あるいは年齢の近さといった生物学的属性を利用しながら、優劣順位制という階層的秩序の中で自己の存在を確保し、そのさらなる拡大を図るきわめて巧妙な適応戦略であることを指摘した。また同時に、集団を構成する各個体が、それぞれの個としての自己実現を図ろうとして他個体と戦略的にかかわることが、結果として集団としての統合と秩序維持に機能していることを指摘した。
12.子別れの心理学－新しい親子関係像の提唱	共	1995年04月	根ケ山光一・鈴木晶夫（編），福村出版	分担：「子別れと集団」(pp.165-179) 根ヶ山光一，鈴木晶夫，田島信元，陳省仁，池田透，塚田英晴，児玉典子，森梅代，金谷有子，中野茂，亀島信也，安藤明人，近藤清美，荘厳舜哉，金子龍太郎，斎藤学 家族からより広い社会集団へその活動の場を広げていく子どもの社会的発達にとって，子別れの過程は重要な意味をもっているという立場から，その過程を社会的ネットワークの視点から論じた。本論では，従来の発達研究が親子関係，それもとくに母親と子どもの二者関係の研究に偏っており，かつ親の側から子の側への一方向的な影響過程の解明に重点が置かれていた点を批判し，親子の相互影響性を視点に入れた，家族を越えたより広い社会的ネットワークの中での対人行動の発達や社会化の問題を解明することの重要性を指摘した。(253p.)
13.ニューメディア時代の子どもたち	共	1994年07月	子安増生・山田冨美男（編），有斐	分担：「子どもの日常世界と仲間遊び」(pp.60-83) 子安、山田、村野井、鳥井、増田、山崎、鈴木、菊江、菊地、向

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
1 著書				
			閣	坂、五藤 ニューメディア時代の到来とともに、子どもの日常的な生活環境は大きく変化してきている。この章（第３章）では、このような激しい変化にさらされながらも、それでもなおたくましく生きようとする現代の子どもの日常世界を、メディア、消費生活、魔法の３つのキーワードから解読し、擬似化、大人化したニューメディア時代の子どもの生活において、仲間遊びが果たす役割について述べた。（299p.）
14.社会心理学	共	1991年05月	瀧上凱令編，近畿大学豊岡短期大学	分担：「社会的行動の基礎」（pp.1－44） 瀧上、安藤、後藤、小花和、余部、川端 社会的行動の基礎として，対人行動の基盤となる，社会的動機，自己，態度，対人認知について概説した。社会的動機については，達成動機，親和動機に加えて，成功回避動機に言及した。自己については，自己のあり方が対人行動にどのような影響を及ぼすかについて，自己意識，自己概念，自尊心と対人行動との関連について分析した研究を紹介した。態度については，説得的コミュニケーション，要請承諾技法の観点から，態度変容を起こす要因を検討した。対人行動に大きな影響を与える対人認知については，パーソナリティ認知とその歪みについて紹介した。(160p.)
15.行動の発達を科学する	共	1990年05月	荘厳舜哉・根ヶ山光一編，福村出版	分担：「社会とかかわる子どもたち」(pp.223-244) 根ヶ山、鎌田、磯、中谷、竹内、今川、藤本、山本、米谷、高橋、竹村、安藤・荘厳 就学前の時期における子どもの社会化の問題を自己の発達と対人行動の発達の観点からとらえて概説した。１節では，幼児における自己の発達を，身体的自己と自己概念のめざめからとらえ，そのような自己の発達を基盤として対人行動の発達が促されることを指摘した。２節では，霊長類集団の構造を分析する際に用いられた「優位構造」「注意構造」「親和構造」の３つの構造的枠組みに基づいて人間の幼児集団の構造を分析した。
2 学位論文				
3 学術論文				
1.行動経済学と感情		2013年6月	感情心理学研究，20(3)，65-70.	Economics, especially neoclassical economics, neglected anomalies in normative economic theory and the relevance of psychological variables for the explanation and prediction of economic behavior. Although emotion has long played a key role in many behavioral theories, it has not generally been recognized as an important component of human judgment and decision making. Behavioral economics, which was pioneered by Kahneman and Tversky, improved the relevance and realism of the psychological assumptions underlying economic theory. They developed a descriptive model of decision making under uncertainty, which they call prospect theory, as an alternative model of expected utility theory. Prospect theory proposes two functions; the value function and the decision weight function. Three principles (reference dependence, diminishing sensitivity and loss aversion) are invoked to explain the characteristic curvature of the value function. That is, the value function is defined on deviations from a reference point, is concave for gains and convex for losses, and is generally steeper for losses than for gains. The decision weight is a nonlinear transformation of the probability scale that overweights low probabilities and underweights moderate and high probabilities. The descriptive study in behavioral economics challenged the theory of rational choice in decision making and suggested that anomalies should not be considered as errors or biases, but they should be accepted as valid elements of human experience. Moreover, to

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
				elaborate theories of behavioral economics, it is necessary to incorporate the perspective of evolutionary adaptive significance of behaviors into the models of decision making.
2.ジェンダー主流化とジェンダー予算分析	単	2009年03月	人間学研究（武庫川女子大学）	
3.アフリカの紛争における民間軍事会社の役割―シェラレオネ内戦を中心として	単	2008年03月	人間学研究（武庫川女子大学）	
4.水泳授業における不安・好悪とパフォーマンスとの関係（２）	共	2007年12月25日	武庫川女子大学発達臨床心理学研究所紀要，9，31-37	田嶋恭江・安藤明人・樫塚正一・目連淳司・伊達萬里子・北島見江・五藤加奈
5.出生率低下に関わる経済学的・進化生物学的要因の検討	単	2007年03月	武庫川女子大学紀要(人文・社会科学編)	近年，主として先進諸国で急速に進行している出生率低下について，経済学的要因と進化生物学要因の２つの観点から考察したもの。経済学的観点については，ライベンシュタインの効用・不効用仮説，ベッカーの質・量モデル，イースターリンの相対所得仮説の３つの仮説を比較検討した。進化生物学的観点からは，出生行動を繁殖戦略あるいは生存戦略の一環としてとらえ，出生率の低下が，ヒトの進化的適応の過程であるという仮説を検討した。
6.カナダの文化産業保護政策とNAFTA	単	2007年03月	人間学研究（武庫川女子大学）	
7.水泳授業における不安・好悪とパフォーマンスとの関係（１）	共	2004年12月	武庫川女子大学発達臨床心理学研究所紀要,6,45-52.	田嶋恭江・安藤明人・樫塚正一・目連淳司・伊達萬里子・北島見江・網野央子・北田紀子 大学における水泳授業の受講学生を対象として，授業開始前に水泳に対して抱く不安や好悪が，その後の授業効果，最終的な泳力の向上にどのような影響を与えるかについて分析したもの。
8.女子運動選手の自己と状態不安について	共	2003年12月	武庫川女子大学発達臨床心理学研究所紀要　５号	田嶋・安藤・樫塚・目連・伊達・田中 大学競技スポーツの上位レベルに位置する女子運動選手を対象として、個人の自己関連特性、競技意欲、運動種目の種別、試合での目標設定と不安との関連を明らかにすることを目的として、競技シーズン開始前のベースラインデータについて分析した。担当（pp.99～106）
9.大学生とクレジットカードをめぐる問題	単	2003年03月	武庫川女子大学紀要（人文・社会科学論）　50号	クレジットカード先進国である米国における大学生のクレジットカード使用をめぐる問題点を指摘し、日本の大学におけるクレジット教育の必要性について述べた。（pp.55～64）
10.大学生のギャンブル行動に関する予備的調査	単	2001年03月	武庫川女子大学紀要（人文・社会科学編）　48巻	日本初の公的なスポーツ・ベッティングであるサッカーくじ導入前における、青少年のギャンブル接触に関するベースラインデータを得るために、大学生384名を対象として行なった予備的調査の結果について、ギャンブル及び疑似ギャンブルゲームへの接触経験、常習ギャンブラーの発生率、ギャンブルへの嗜癖、ギャンブルに対する認知の観点から分析した。全（pp.21～28）
11.Effects of hostility and lifestyle on coronary heart disease among middle-aged urban Japanese.	共	2001年	Journal of Epidemiology, 11, 243-248.	Nishi,N., Nanto,S., Shimai,S., Matsushima,Y., Otake,K., Ando,A., Yamasaki,K., Soga,S., & Tatara,K. Objective: To explore the association between multi-dimensional aspects of hostility and coronary heart disease among middle-aged urban Japanese. Subjects and Methods: We conducted a case-control study. Cases were consecutive patients with acute coronary syndrome admitted to a hospital in Japan. Fifty-three patients (45 men and 8 women) aged 35 to 65 were enrolled. For each case, two sex and age (±2 years) matched controls were recruited from among participants in a health check-up program at a health promotion center located in the same area as the hospital. Two questionnaires, both with four components, were used to measure hostility and coping with anger: the

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
				one was for anger, hostility, physical aggression and verbal aggression, and the other for aggression, social inhibition, guilt, and controlled affect. Results: The scores of all components from two questionnaires were higher for cases than controls, but the differences were not significant. Multivariate analysis showed that anger, fat intake, alcohol consumption and house size were significantly associated with the etiology of acute coronary syndrome. Conclusion: Anger, lifestyle, and socioeconomic status play important roles for the etiology of coronary heart disease in middle-aged urban Japanese.
12.日本版Muller Anger Coping Questionnaire (MAQ) の作成と妥当性・信頼性の検討	共	2000年09月	感情心理学研究, 7,13-24	大竹恵子･島井哲志･曽我祥子・宇津木成介・山崎勝之･大芦治･坂井明子･西信雄･松島由美子･嶋田洋徳・安藤明人
13.サッカーくじの導入が若者のギャンブルに及ぼす影響	単	2000年03月31日	武庫川女子大学紀要（人文・社会科学）, 47, 21-28.	Legalized gambling has proliferated recently in many countries and the prevalence of pathological gambling becomes a social pathological and public health issue. In Japan, soccer lottery is scheduled to start in 2001 as a new type of publicly-managed gambling. Relatively little is known about the effects of the advent of sports betting on youth gambling. This paper summarizes the major findings of prevalence survey of gambling among youth undertaken in the US, Canada and UK, and discusses measures to cope with the gambling problems among youth in Japan.
14.日本版Buss-Perry攻撃性質問紙(BAQ)の作成と妥当性，信頼性の検討	共	1999年12月25日	心理学研究, 70, 384-392.	安藤明人・曽我祥子・山崎勝之・島井哲志・嶋田洋徳・宇津木成介・大芦治・坂井明子 攻撃性質問紙（Buss & Perry, 1992）は，人格特性と健康との関連を調べるのに使われてきている。われわれは，日本版Buss-Perry攻撃性質問紙（BAQ）を作成し，その妥当性と信頼性を検討した。1,125名の大学生を対象とした調査１では，45項目からなる質問紙を使って，攻撃性の構成概念である短気，敵意，身体的攻撃，言語的攻撃，の４つの下位尺度について測定した。探索的因子分析により，攻撃性のこの４つの下位尺度を抽出することができた。確証的研究である調査２では，611名の大学生に対して24項目の質問紙を実施し，調査１と同様の因子構造と因子負荷を得た。この尺度は高い内的一貫性を示し，また４カ月の間隔を置いたテスト－再テスト信頼性の検討でも十分なレベルの安定性を示した。標準データ，因子的妥当性および構成概念妥当性，収束的・弁別的妥当性についてもデータが提示された。
15.インターネット依存とインターネット・ギャンブル	単	1999年11月	武庫川女子大学文学部50周年記念論文集	インターネットの加速度的な普及がもたらした負の側面として、インターネット・アディクションの現状を紹介し、さらにそれに付随する問題として、インターネット・ギャンブルの問題を検討した。全（pp.405～416）
16.映像の動きと音楽のテンポのマッチング	共	1997年03月31日	武庫川女子大学紀要（人文・社会科学編）, 44, 109-112.	丸山健夫・安藤明人
17.青年期の規範意識に関する社会心理学的研究	単	1997年03月	上廣倫理財団研究助成報告論文集（第７回、平成５年度）	高校生・大学生を対象として、その規範意識を反社会規範的な逸脱行為に対する許容度の観点から調べ、行為者の性による規範行為の基準に見られるダブル・スタンダードを明らかにし、その年齢的な変化について分析した。（pp.１－28）
18.幼児のコントロール欲求の発達に関する実験的研究	単	1997年03月	平成７・８年度文部省科学研究費補助金（基盤研究Ｃ）研究成果報告	幼稚園幼児におけるコントロール欲求（desire for control）の発達過程を明らかにするために、スキル課題（輪投げ）とチャンス課題（くじ引き）における予測行動と遂行行動を観察し、予測行動に

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
			書	見られる個人差（性差、年齢差）、および予測行動と遂行行動との関連について検討した。（pp. 1 －42）
19.グラフ理論を用いたニホンザルのグルーミング・ネットワークの分析	単	1997年03月	武庫川女子大学紀要（人文・社会科学編） 44巻	野生ニホンザルのグルーミング・ネットワークの構造分析手法として、グラフ理論を導入し検討することにより、グルーミング・ネットワークの構造が交尾期における細分化あるいは分断化と、非交尾期における“スター型”への統合化、という繁殖周期と連動した周期的な変化を繰り返すことを明らかにした。（pp.89－97）
20.コントロール欲求と要求水準	単	1996年03月	武庫川女子大学紀要（人文・社会科学編）43巻	本研究は、個人の目標設定行動の個人差変数としてのコントロール欲求の有効性を検討することを目的として実施された。100名の女子大学生を対象として、コントロール欲求尺度日本語版（安藤、1995）を用いて調べられたコントロール欲求の高低と単純加算作業における目標設定行動によって分類された欲求水準のタイプとの関連性について分析した。（pp.79～86）
21.Interactivity and desire for control in multimedia storybooks	共	1995年03月	武庫川女子大学紀要 42巻111-116頁	Maruyama,T. & Ando,A. マルチメディア絵本における双方向性が、ユーザーの満足度にどのように影響を与えるかについてコントロール欲求の概念を取り入れて検討した。
22.コントロール欲求尺度（The Desirability of Control Scale）日本語版の作成	単	1995年03月	武庫川女子大学紀要42巻103-109頁	さまざまな分野で人間の行動を説明する要因となり、重要な人格変数の一つとして利用価値が高いと考えられるコントロール欲求を測定するコントロール欲求尺度を作成して、その尺度としての信頼性、妥当性を検討した。その結果、コントロール欲求尺度日本語版は、心理学的尺度としての要件をほぼ満たしていることが確認された。
23.高校生の規範意識に関する研究（３）－大学生との比較を中心として－	単	1994年03月	武庫川女子大学紀要41巻	現代の高校生の規範意識の態様を明らかにするために、469名の高校生を対象として、30項目の反社会規範行為に対する許容度を調査し、その結果を従来の研究で得られている大学生の結果と比較した。高校生は、大学生と比較して、規範からの逸脱に対して許容度が高く、また行為者の性によって規範の基準を変えるというダブル・スタンダードは、大学生ほど顕著ではなかった。
24.ニホンザル自然集団における成体雌のグルーミング・ステイタスの分析	単	1993年03月	武庫川女子大学紀要（人文・社会科学編） 第40巻	野生ニホンザル集団において行われたグルーミング行動の観察に基づき、各個体のグルーミング・ステイタスを算出し、その分析からその高低を規定する要因として、社会的な個体変数のひとつである優劣順位の重要性を指摘した。（pp.17－24）
25.女子大学生の規範意識に関する研究（4）－反社会規範行為に対する意識の性差について－	単	1992年03月	武庫川女子大学紀要（人文・社会科学編） 第39巻	現代の女子大学生の規範意識に関する一連の研究の第４報。従来の研究では、調査の対象は女子大学に通う女子大学生のみであったが、本研究では、規範意識に関する同様の調査を男子大学生に対しても行い、規範意識における性差の解明を行った。その結果、女子にみられた、男性よりも女性に対してより厳しい規範行為の基準を課すというダブル・スタンダードが、男子大学生においても基本的に同じ形でみられた。（pp.63－70）
26.Demography and reproductive parameters of a free-ranging group of Japanese macaques (Macaca fuscata).	共	1992年01月	Primates, 33, 49-68.	Itoigawa,N., Tanaka,T., Ukai,N., Fujii,H., Kurokawa,T., Koyama,T., Ando,A., Watanabe,Y., & Imakawa,S.
27.女子大学生の規範意識に関する研究（2）－反社会規範行為に関する認知的側面からの分析－	単	1991年03月	武庫川女子大学紀要（人文・社会科学編） 第38巻	現代の女子大学生の規範意識の態様を明らかにするために、「自己の反社会規範行為」「他の学生の反社会規範行為」「教師が学生の反社会規範行為に対していだいているイメージ」、それぞれに対して女子大学生がもっている認知を明らかにし、その３者の間の認知的ギャップを分析したもの。（pp.79－86）

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
28.大学生の規範意識と社会的自己に関する社会心理学的研究	単	1990年06月	Σ（上月教育財団） No.8	現代の女子大学生の規範意識の態様について、女子大学生のもつ性の違いによる規範意識の相違というダブル・スタンダードの観点から明らかにし、さらにそれと個人の社会的自己のあり方との関連について検討したもの。（pp.101－110）
29.女子大学生の大学適応に関する研究（1）－大学への動機づけ、人格特性と適応との関連	単	1990年03月	武庫川女子大学紀要（人文・社会科学編） 第37巻	女子大学生の大学への適応を規定する要因について、大学への進学・入学動機、制服に対する態度、人格特性、などの観点から検討を行なったもの。（pp.123－135）
30.ニホンザル自然集団における非血縁雌間グルーミングの分析	単	1989年03月	武庫川女子大学紀要（教育学科編） 第36集	勝山ニホンザル餌付け自然集団において、血縁関係のない成体雌間のグルーミング関係を、属する血縁の優劣順位と年齢の観点から分析したもの。（pp.89－103）
31.現代の子どもの問題状況と日常的生活環境－擬似環境に生きる子どもたち	単	1988年10月	西宮都市政策論集	現代の青少年の病理的現象（非行、いじめ、校内暴力、自殺）について概説し、そのような問題行動が生起する原因について、青少年が生きている生活環境およびそれを取りまく価値観が限りなく「擬似化」され「おとな化」されているという観点から分析したもの。（pp.75－108）
32.幼稚園における幼児の集団形成過程の研究－入園直後15日間の行動観察から－	単	1988年03月	武庫川女子大学紀要（教育学科編） 第35集	初めて体系的、永続的な集団生活を経験する幼稚園年少組幼児を対象として、その集団形成直後（入園直後）15日間の幼児の行動および対人関係について、自由遊び場面における比較行動学的な行動観察に基づいて分析したもの。（pp.167－175）
33.Basic behavioral profiles among adults of the Arashiyama A troop and the Arashiyama B troop.	共	1988年	In: Research reports of the Arashiyama West and East groups of Japanese monkeys, Osaka University, pp.1-17	Negayama,K., Ando,A., Hara,K., Kamada,J., Kondo-Ikemura,K., Koyama,T., Nakamichi,M. & Yoshida,A. 米国テキサス州の放飼場で生活している嵐山Ａ群の成体の基本的な行動プロフィールについて分析した。
34.Grooming relationships of the transplanted Arashiyama A group of Japanese macaques (Macaca fuscata).	単	1988年	In: Research reports of the Arashiyama West and East groups of Japanese monkeys, Osaka University, pp. 41-49.	1972年に京都の嵐山より米国テキサス州の半乾燥地帯に移され、約20haの放飼場で生活している嵐山Ａ群において、１年の内で最も暑い時期に当たる1983年７月から８月にかけて行った観察に基づいてグルーミング関係の分析を行い、そのネットワーク構造を岡山県の勝山集団と比較検討したもの。
35.ニホンザル自然集団における雌のみなしごのグルーミング関係	単	1987年02月	武庫川女子大学紀要（人間関係コース編） 第２（34）集	野生ニホンザル集団において、成体になる前に母親を失った４頭の雌のみなしごを対象として、そのグルーミング関係をみなしごとなった年齢、優劣順位などの観点から分析したもの。その結果、みなしごは同一血縁個体とのグルーミング関係が希薄であることが指摘された。（pp.43－53）
36.設置環境の異なる２つの児童公園の利用実態に関する社会学的研究－岡山県津山市における事例－	単	1986年03月	美作女子大学・美作女子大学短期大学部紀要 通巻31号	岡山県津山市にある18の児童公園の中から、住宅密集地にあり遊び環境としては恵まれていない地区にある児童公園と、住宅地にあり遊び環境としては恵まれている地区にある児童公園を、それぞれ１カ所づつ研究対象に選び、その公園の利用実態調査から、設置環境が対照的なこの２つの児童公園は、その利用実態も対照的であることが指摘された。（pp.21－38）
37.出産に伴うグルーミング・ステイタスの変化	単	1986年02月	1985年度科学研究費補助金（一般研究Ａ）研究成果報告書『ニホンザルの生涯発達に関す	岡山県勝山町に生息しているニホンザル集団における１年間にわたるグルーミングの観察に基づいて、特に、出産に伴う雌のグルーミング関係の変化について、グルーミング・ステイタスを指標として年齢、優劣順位の観点から分析したもの。その結果、優劣順位の低

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
			る比較行動学的研究』（大阪大学）	い血縁系に属する個体が、出産前後で異なる程度の大きいことが指摘された。（pp.39－51）
38.幼児の行動および集団の研究におけるdominance概念の有効性の検討	単	1985年03月	美作女子大学・美作女子大学短期大学部紀要　通巻30号	霊長類の研究の重要な分析軸として用いられてきたdominance概念が、近年特にヒューマン・エソロジーの分野において、人間の幼児の行動あるいは集団の分析軸として用いられるようになってきた。この立場からなされたさまざまな研究の方法論、結果などを紹介しながら、このdominance概念が人間の幼児の研究においても、ひとつの分析軸として重要な視点を提供することを指摘した。（pp.26－37）
39.霊長類の集団構造の研究におけるdominance概念の検討	単	1984年03月	美作女子大学・美作女子大学短期大学部紀要　通巻29号	霊長類の研究の初期のころより、霊長類集団の分析軸のひとつとして用いられてきたdominance（優劣順位）の概念を、その定義、測定法、機能などの観点から整理し、集団構造の分析におけるdominance概念の有効性について検討を行なった。その中で、Rowell、 T-E-によって口火が切られたdominance批判の論点を紹介し、その立場に組する形で、霊長類の集団構造の分析軸としてのdominance概念に対する従来の過大評価を批判した。（pp.26－37）
40.雌の繁殖活動の発達からみたニホンザルの個体群動態－勝山餌付け自然集団において－	共	1983年03月	仏教大学心理学研究所紀要第１号	安藤明人・鵜飼信行 岡山県勝山町に生息しているニホンザル集団の長期にわたる通時的な構造変容をとらえるために、その基礎的資料として、デモグラフィックな個体群動態の整理を行なったもの。中でも特に、集団の個体群動態に大きな影響を与えている雌の繁殖活動（出産率、初産年齢、出産間隔、年齢別出産率など）の分析を中心にした。（pp.40－46）
41.ニホンザルのグルーミング関係の分析－勝山餌付け自然集団において－	単	1983年03月	動物心理学年報第32輯第２号	岡山県勝山町に生息している野生の餌付け自然集団を対象にして、約１年間にわたってグルーミング関係の観察を行なった。そのグルーミング関係を計量的に分析し、その結果、ニホンザル集団の統合には、血縁関係のない雌間の親和的結合が重要な意味をもっていることを指摘した。（pp.59－71）
42.サルの社会から学ぶもの	単	1982年05月	家庭科教育　第56巻第６号	ニホンザル社会を成り立たせている秩序原理である順位性と血縁性について論じたもの。（pp.67－71）
43.子育ての比較行動学	単	1982年01月	発達第９号	霊長類と人間の子育て行動の比較行動学的考察から、人間という種の発達の特殊性を論じたもの。（pp.60－71）
その他				
１．学会ゲストスピーカー				
1.行動経済学と感情	単	2012年5月27日	日本感情心理学会第20回大会　開催校企画講演（神戸大学）	2002年度のノーベル経済学賞が心理学者のD.カーネマンに与えられたことにより，心理学と経済学の新たな関係のページが切って落とされた。現在では行動経済学という学問への一般的な認知度も高まり，人間の経済行動を経済学ではなく心理学の視点から分析しようという試みは，さまざまな新しい研究の地平を切り開きつつあるようにみえる。 しかし現在の心理学と経済学の関係をもう少し立ち入って眺めてみると，標準的経済学が仮定する超合理的な人間（Homo economicus)と心理学が対象とする現実の人間との相違は大きく，そのため心理学と経済学の「復縁」が順調に進んでいるとは言い難い。 そこでこの講演では，二つの学問の「復縁」を進めるためには，感情心理学が果たす役割が非常に大きいことを，後悔(regret)をキーワードとして述べた。
２．学会発表				
1.「所有からシェア」の時代における「所有」を考える	単	2020年3月4日	日本発達心理学会第31回大会	2010年代に入り，シェアリングエコノミーが急速な広がりを見せている。スマートフォン，AI，IoT，SNSといった技術革新の成果により，モノ，スキル，情報が個人を超えて不特定多数の個人間で共有できるようになり，人びとの所有に対する考え方に大きな変化が現れてきている。「所有からシェア（共有）へ」「所有から利用（使

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
２．学会発表				
				用）へ」という言葉に代表されるように，過去から私たちが持ち続け共有してきたはずのモノの所有への希求や愛着といった所有に対する価値観が揺らいできている。 これまで，ヒトの発達・社会化において所有がもつ意味について多くの検討が加えられてきた。古くはJames,W.が，客我を構成するものの一つに自分の所有するモノがあるとし，Belk,R.W.は拡張自己という概念により，自己の境界が私という認識世界を超えて，物質的・具体的なモノや所有物にまで広がっているとした。また Winnicott,D.W.は，乳幼児が特別の愛着を寄せる特定のモノを移行対象と呼び，その発達的意味について論じている。発達心理学の分野においても，モノの所有の問題は古くから研究され，乳幼児がモノの所有をめぐって他者と関わり，いざこざや葛藤を経験し，関係調整を図るなかで社会化を達成していくことを明らかにしてきている。 この意味で，所有の問題は“古い”問題である。しかし，現在進行しつつある所有に対する人びとの価値観の変化は，ビジネスの世界においてはパラダイムシフトともいうべき変化を企業に求めるようになってきている。そんな今，新たな時代の「所有」の問題を考えることは，発達心理学のみならず，広く心理学にとっても大きな意義があると考えこのシンポジウムを企画した。
2.大学生の自立と学習（１）：自立性尺度の作成	単	2013年8月17日	日本教育心理学会第55回総会（発表論文集，p.245）	本研究では，自立性を育てる教育を推進するために必要な大学における学習のあり方を検討するために，在籍全学生を対象として実施された大規模悉皆調査をもとに，大学生の自立性を測定する尺度の作成と検討を行った。
3.大学女子競技運動選手のバーンアウト傾向	共	2011年9月17日	日本心理学会第75回大会（発表論文集,p.1276）	安藤明人・田嶋恭江 本研究では，高校までに運動部を経験した大学生を対象にして，バーンアウト傾向とタイプA行動傾向との関連を検討した。
4.女子高校陸上選手の自律訓練法の効果	共	2011年9月17日	日本心理学会第75回大会（発表論文集,p.1280）	田嶋恭江・安藤明人 本研究では，スポーツ選手の効果として研究例の少ない女子高校生を対象とし，試合前にも実施できる簡易自律訓練法を行うことで，競技場面における緊張や不安をどの程度コントロールすることができたのかを検証することで，簡易自律訓練法の効果と試合前のATを実施することの有効性について明らかにすることを目的とする。
5.就学前の愛着スタイルが大学生の愛着スタイル及び心理的ストレスに及ぼす影響	共	2011年9月15日	日本心理学会第75回大会（発表論文集，p.1007）	栗須世都子・安藤明人 本研究では乳幼児期の母子関係における愛着が青年期の対人関係における愛着へと派生し、心理的ストレスに与える影響についてのモデルを作成し、そのモデルの妥当性を検討するため共分散構造分析による検証を試みた。また本研究では、愛着パターンの分類(タイプ分け)を行うのではなく、特徴(傾向)を把握し、就学前の母子関係(親への愛着の回想〉と成人の対人関係における愛着が関連するのかについて検討した。
6.ダブルオークションによる価格調整過程に関する実験的検討	単	2009年08月26日	日本心理学会第73回（発表論文集，p.1311）	本研究では，実験的に設定した市場において，市場の参加者が自由に売値買値をつけられるダブル・オークションを行うことにより，ワルラス的調整過程により完全競争均衡が達成されるかどうかを検討することを第一の目的とする。その際，通常の実験経済学の実験では価格調整過程に影響を与えないとされる，複数回にわたる取引経験による学習過程について検討した。
7.テキストマイニングによる企業の社是・社訓の分析	単	2008年09月19日	日本心理学会第72回（発表論文集，p.1365）	テキストマイニングの手法を用いて企業の社是・社訓に含まれるキーワードの抽出を行い，その特徴を，企業の業種，上場市場の観点から分析を行った。また，試行的に，社是･社訓と企業業績との関連について検討した結果についても報告した。
8.企業の社訓・社是が企業の行動に及ぼす影響過程に関する実証的研究	単	2007年09月1日	企業家研究フォーラム秋季研究会（大阪企業家ミュージアム）	テキストマイニングの手法を用いて企業の社是・社訓に含まれるキーワードの抽出を行い，その特徴を，企業の業種，上場市場の観点から分析を行った結果について報告した。
9.関西の商人文化の基盤となる起業家精神に関する実証的研究	単	2007年03月	第2回MKCRワークショップ	

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
２．学会発表				
（中間報告） 10.状況の違いから探る消費者の商品に対する重要視ポイント	共	2006年09月18日	日本社会心理学会第47回大会	岡崎奈々・安藤明人・土田昭司
11.女子大学生の職業観と起業家精神（２）	単	2005年9月17日	日本教育心理学会第47回総会（発表論文集，p.284）	職業生活への｢出口｣にいる大学生を対象として，学年，親との経済的関係，出身地域（関西，関西以外）が，職業観・就労観の態様や起業家精神を構成するパーソナリティ特性の保有とどのように関連しているかを明らかにしたもの。
12.女子大学生の職業観と起業家精神（１）		2005年9月10日	日本心理学会第69回大会（発表論文集,p.1121）	職業観・起業家精神の獲得・発達に関わる諸要因を明らかにするための予備的調査として,職業生活への「出口」にいる女子大学生を対象として，現在保有している職業意識・就労意識を明らかにするともに，それらが家庭におけるしつけや親の職業といった家族の要因やパーソナリティ要因とどのように関連しているかを明らかにしたもの。
13.｢群れること｣と共感的行動－動物における共感的かかわりへの比較行動学的接近－	単	2005年3月28日	日本発達心理学会第16回大会（発表論文集,p.202）	「他者との共感的かかわりと感情制御」をテーマとするシンポジウムにおいて，比較行動学（エソロジー）の視点から，ニホンザルの情動を共有する行動としてのグルーミング行動と集団内での個体行動のコントロールとの関連について話題提供したもの。
14.関西の女子大学生の職業観と起業家精神に関する予備的調査	単	2005年03月22日	「関西圏の人間文化についての総合的研究」ワークショップ	大阪・関西圏の「商人文化」の基底となる精神とも言うべき起業家精神が大阪・関西圏に暮らす人びとの間にどのように根づいているかを調べるために実施した予備調査の結果の概要を報告したもの
15.女子大学生の職業観と起業家精神	単	2005年03月3日	武庫川女子大学関西文化研究センター第13回MKCRセミナー	全体の研究の枠組みを，「経済的社会化（発達）」「空間的特性（地域性）」「時代性（歴史・進化）」の3次元でとらえる方法を提言し，その枠組みに基づいて行った女子大学生のデータの分析結果を報告した。
16.関西圏ということ-歴史性と地域性をふまえて－（コーディネーター）	共	2005年03月		シンポジウム
17.水泳授業における不安・好悪とパフォーマンスとの関連（１）	共	2004年09月12日	日本心理学会第68回大会（発表論文集,p.1224）	安藤明人・田嶋恭江 競技運動選手でない一般の女子大学生を対象として，水泳という非日常的な運動の技能修得に際してもつであろう不安や好悪の態様が，結果としての技能習得や泳力などのパフォーマンスにどのように関連しているかを明らかにしたもの。
18.大学生の経済生活と経済リテラシー	単	2003年09月14日	日本心理学会第67回大会（発表論文集,p.182）	大学生の経済リテラシーとして基本的な経済的知識・理解度のレベルを調べることを第１の目的とし、それが日常的な経済活動・消費態度・職業意識など認知・行動レベルでの経済生活とどのように関連しているかについて検討することを第２の目的とした。
19.大学生の経済生活と職業観	単	2003年08月23日	日本教育心理学会第45回総会（発表論文集，p.269）	本研究は、職業生活への「出口」にいる大学生を対象として、家庭や学校での「お金」や「働くこと」に関する教育の経験、現実の経済活動や経済知識の実態と職業意識・就労意識との関連を明らかにすることを目的として実施された。ここでは特に、過去・現在の経済活動経験と職業意識との関連について検討することを目的とした。
20.女子競技運動選手の自己と競技不安（２）	共	2002年09月25日	日本心理学会第66回大会（発表論文集，p.1204）	安藤明人・田嶋恭江 大学競技スポーツの上位レベルに位置する女子運動選手を対象として、個人の自己関連特性、競技意欲、運動種目の種別、試合での目標設定と不安との関連を明らかにすることを目的として行なわれた研究の第２報。
21.女子競技運動選手の自己と競技不安	共	2001年11月	日本心理学会第65回大会（発表論文集,p.1091）	安藤明人・田嶋恭江 大学競技スポーツの上位レベルに位置する女子運動選手を対象として、個人の自己関連特性、運動種目の種別（個人・集団）、試合での目標設定と不安との関連を明らかにすることを目的として調査を行なった。
22.小学生の商業体験活動	単	2001年09月7日	日本教育心理学会第43回総会（発表論文集，p.54）	小学生の商業体験活動（キッズ・マートにおける出店体験）が、「生きる力」をもった人材育成に取り組んでいる教育活動の中で、いかなる意義・効果あるいは問題点を有しているかを検討すること

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
２．学会発表				
23.Field experiment of resource utilization of Japanese preschool children in a cooperative/ competitive situation.	共	2001年04月19日	2001 Biennial Meeting of Society for Research in Child Development at Minneapolis	を目的として、参与観察とインタビューにより分析を行なった。 限られた資源（アニメ視聴）を獲得するためには、他児の協力（レバー押し）が必要である場面を自由遊び場面に設定し、その場面における幼稚園幼児26名の援助行動、アニメ視聴行動を観察し、協力、競争行動の発達的変化について報告した。
24.コントロール欲求と要求水準	単	2000年11月8日	日本心理学会第64回大会（発表論文集，p.33）	単純加算作業という達成課題を用いて、その連続した一連の作業における目標設定行動を分析することにより、各被験者の要求水準のたて方にみられる個人差を説明する要因として、コントロール欲求が有効であるかどうかについて検討した。
25.大学生のギャンブル行動に関する調査（2）	単	2000年09月16日	日本教育心理学会第42回総会（発表論文集，p.262）	日本発達心理学会第11回大会に引き続き、日本初の公的なスポーツ・ベッティングであるサッカーくじ導入前における、青少年のギャンブル接触に関するベースラインデータを得るために、大学生384名を対象として行った予備的調査の結果について分析を行なった。
26.大学生のギャンブル行動に関する調査	単	2000年03月28日	日本発達心理学会第11回大会（発表論文集,p.304）	2001年３月から登場する日本最初の公的なスポーツ・ベッティングであるサッカーくじが青少年に与える悪影響に関して懸念されている。サッカーくじの導入の問題点を検討するためのベースライン・データを得ることを目的として、青少年のギャンブル接触に関する予備的調査を実施し、その現状を分析した。
27.自主シンポジウム（「児童・生徒の学校適応について考える」）の指定討論	共	1997年09月24日	日本教育心理学会第39回総会	児童・生徒の学校適応の問題に対する研究や教育実践のいくつかのアプローチについて、①学校適応のプロセス、②学校適応に果たす個人的・心理的要因、③不適応児に対する治療としての学校カウンセリング、④情報化への移行期にある学校での児童生徒の適応、の観点から話題提供された内容に関して、指定討論者として問題点を整理し、議論を深めた。
28.日本版Buss-Perry攻撃性質問紙（BAQ）の作成（２）－大学生を対象とした調査結果から、因子得点、性差、因子間の関係－	共	1997年09月18日	日本心理学会第61回大会（発表論文集,p.904）	大芦治・曽我祥子・安藤明人・島井哲志 Buss & Perry（1992）の尺度を基礎として、日本版の攻撃性質問紙（BAQ）を作成し、大学生を対象として実施した結果に基づいて、因子得点、性差、因子間の関係の観点から尺度の検討を行い、心理学的尺度としての基本的要件を満たす尺度であることを確認した。
29.日本版Buss-Perry攻撃性質問紙（BAQ）の作成（１）－大学生のデータによる因子的妥当性・信頼性の検討－	共	1997年09月18日	日本心理学会第61回大会（発表論文集,p.903）	安藤明人・曽我祥子・小西賢三・山崎勝之 Buss & Perry（1992）の尺度を基礎として、日本版の攻撃性質問紙（BAQ）を作成し、大学生を対象として実施した結果に基づいて、その因子的妥当性・信頼性の検討を行い、心理学的尺度としての基本的要件を満たす尺度であることを確認した。
30.幼児における随伴性の知覚と行動（３）－遂行行動と予測行動との関連－	単	1997年03月27日	日本発達心理学会第8回大会（発表論文集,p.36）	行動と結果の随伴性に関する幼児の知覚の態様を、スキル課題とチャンス課題における幼児の結果の予測行動の観察により検討した研究の第３報。年長、年中にかかわらず、輪投げ課題の行動観察記録から評定された達成意欲は、男児の方が女児より有意に高く、就学前の段階ですでに達成に対する動機づけに性差が見られることが明らかになった。
31.幼児における随伴性の知覚と行動（２）－結果の予測における個人差の検討－	単	1996年09月10日	日本心理学会第60回大会（発表論文集,p.253）	行動と結果の随伴性に関する幼児の知覚の態様を、スキル課題とチャンス課題における幼児の結果の予測行動の観察により検討した研究の第２報。結果の予測において過大な成功の予測をする幼児は、課題の違いによる予測の方略の相違は見られなかった。一方より現実に近い予測をする幼児は、スキル課題においては予測において過大評価傾向が見られたが、チャンス課題においては、遂行成績とほぼ同じレベルの予測を行い、課題によって予測の方略を変えていることが明らかになった。
32.音楽と映像のマッチング（１）－テンポと動き－	共	1996年09月10日	日本心理学会第60回大会（発表論文集,p.689）	丸山健夫・安藤明人 音と映像という異なるモダリティー間のマッチングについて行なった実験について報告した。

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
２．学会発表				
33.幼児における随伴性の知覚と行動－スキル課題とチャンス課題における結果の予測	単	1996年03月28日	日本発達心理学会第7回大会（発表論文集,p.68）	幼児のコントロール欲求の発達過程を分析するために、まずコントロール概念の基盤となる行動と結果の随伴性に関する幼児の知覚の態様を、スキル課題とチャンス課題における幼児の結果の予測行動の観察により検討した。
34.コントロール欲求とギャンブリング行動（２）－性格特性との関連	共	1995年10月13日	日本心理学会第59回大会（発表論文集,p.202）	安藤明人・丸山健夫 安藤（1995）が作成したコントロール欲求尺度日本語版を用いてコントロール欲求の強さを測定し、その高低とギャンブリング行動との関連について検討した。ギャンブリング行動については、成功確率は低いが自分の力である程度結果を出せる選択肢と、成功確率は高いが運や偶然に任せる割合の大きい選択肢のどちらを選択するかを観察した。コントロール欲求の高低とギャンブリング行動の間には、有意な関連は認められなかった。
35.女子中学生の規範意識に関する研究	単	1995年03月29日	日本発達心理学会第6回大会（発表論文集,p.87）	361名の女子中学生を対象として、規範意識に関する調査を行ない、今までの大学生、高校生（男女とも）を対象とした研究で確認された、男子より女子により厳しい規範行為の基準をもつというダブル・スタンダードが、女子中学生においても認められることを明らかにした。また中学２年生の規範意識が、１年、３年のいずれよりも有意に厳しく、この結果は規範意識の内化のプロセスを考える上で興味深い。
36.コントロール欲求とギャンブリング行動	共	1994年10月2日	日本心理学会第58回大会（発表論文集,p.36）	安藤明人・丸山建夫 Burger & Cooper（1979）のコントロール欲求尺度（The Desirability of Control Scale）の日本語版を作成し、その信頼性と妥当性を検討した。特に、ＤＣ尺度の構成概念妥当性を検討するために、偶然によって結果が左右される事象を自分の力によってコントロールしようとする欲求の強さをギャンブリング行動によって測定し、それとＤＣ尺度との関連について分析した。
37.資源を獲得するために協力を必要とする事態における幼稚園幼児の行動（４）	単	1994年03月29日	日本発達心理学会第5回大会（発表論文集,p.250）	限られた資源（アニメ視聴）を獲得するためには、他児の協力（レバー押し）が必要である場面を自由遊び場面に設定し、その場面における年少組幼児の援助行動、アニメ視聴行動を６月、１０月、３月の３回にわたって観察し、行動の発達的変化について報告した。
38.高校生の規範意識に関する研究（２）－規範意識の性差について－	単	1993年10月9日	日本教育心理学会第35回総会（発表論文集,p.312）	260名の女子高校生と209名の男子高校生を対象として、反社会規範行為に対する許容度の観点から規範意識を分析し、その性差の検討を試みた。その結果、男子も女子も女性に対してより厳しい規範行為の基準をもっているという点においては、基本的に同じで性差は見られなかった。しかし性の相違によって規範行為の基準を変える傾向（ダブル・スタンダードの大きさ）は、従来得られている大学生の結果と比較すると希薄であった。
39.高校生の規範意識に関する研究（１）－性による規範の相違の認知について－	単	1993年09月9日	日本心理学会第57回大会（発表論文集p.573）	高校生女子260名を対象として行った規範意識に関する調査結果を、従来行った大学生女子の結果と比較することにより、女子高校生の規範意識においてもダブル・スタンダードが存在しているが、その行為者の性によって規範行為の基準を変えるという意識・態度は大学生女子に比べて希薄であることを明らかにした。
40.資源を獲得するために協力を必要とする事態における幼稚園幼児の行動（3）	単	1993年03月28日	日本発達心理学会第4回大会（発表論文集,p.121）	限られた資源（アニメ視聴）を獲得するために、他児の協力（レバー押し）が必要である場面を自由遊び場面に設定し、その場面における年少組幼児の援助行動、アニメ視聴行動を分析した。（pp.121）
41.自由遊び場面における幼稚園幼児のアニメ視聴行動	単	1992年03月28日	日本発達心理学会第3回大会（発表論文集,p.30）	ラウンドテーブル「テレビ・ビデオゲーム、ＣＡＩをめぐって」の話題提供者として、幼稚園幼児の対人的な遊びとの比較において、アニメ視聴行動の特徴について報告を行った。（pp.30）
42.資源を獲得するために協力を必要とする事態における幼稚園幼児の行動（2）	単	1992年03月28日	日本発達心理学会第3回大会（発表論文集,p.61）	限られた資源（アニメ視聴）を獲得するためには、他児の協力（レバー押し）が必要である場面を自由遊び場面に設定し、その場面における年少組幼児の援助行動、アニメ視聴行動を分析した。（pp.61）
43.女子大学生の規範意識に関する研究（3）－男子大学生の規範意識との比較	単	1991年10月31日	日本心理学会第55回大会（発表論文集,p.546）	259名の女子大学生と265名の男子大学生を対象として、反社会規範行為に対する許容度の観点から規範意識を分析し、その性差の検討を試みた。その結果、男子も女子も女性に対してより厳しい規範行為の基準をもっているという点においては、基本的に同じで性差はみられなかった。しかし性の相違によって規範行為の基準を変える

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
２．学会発表				
				傾向の強さ（ダブル・スタンダードの大きさ）は、男子大学生の方が強く現れた。（pp.546）
44.多変量解析による野生ニホンザル成体雌のグルーミング・ステイタスの分析	単	1991年05月18日	日本動物心理学会第51回大会	勝山ニホンザル餌付け自然集団において69頭の成体雌のグルーミング・ステイタスを算出し、その高低を説明する社会的・生物学的要因を明らかにするために、年齢と血縁系順位を説明変数にとって多変量解析を行ない、各要因のグルーミング・ステイタスに対する説明力を検討した。
45.資源を獲得するために協力を必要とする事態における幼稚園幼児の行動	単	1991年03月31日	日本発達心理学会第2回大会（発表論文集,p.165）	限られた資源（アニメ視聴）を獲得するためには、他児の協力（レバー押し）が必要である場面を自由遊び場面に設定し、その場面における年長組幼児の援助行動、アニメ視聴行動を分析した。（pp.165）
46.女子大学生の規範意識に関する研究－性による規範の相違の認知について	単	1990年10月11日	日本教育心理学会第32回総会（発表論文集,p.65）	262名の女子大学生を対象にして、反社会規範行為に対する意識・態度を、その行為者が女子大学生である場合と、男子大学生である場合で、それに対する許容度がどのように異なるかという観点から分析し、男性よりも自分の性である女性に対して、より厳しい規範行為の基準をもっていることを明らかにした。（pp.65）
47.女子大学生の大学適応に関する研究（2）－高適応者と不適応者の要因分析－	単	1990年06月3日	日本心理学会第54回大会（発表論文集,p.67）	551名の女子大学生の中から、大学に対する満足度、誇りがともに高い高適応群と、それが低い不適応群を抽出し、両群の学生の大学教育への動機づけ、人格特性などを比較検討することにより、大学への適応状況に差を生じさせている要因の分析を行なったもの。（pp.67）
48.幼児の集団における適応と自立	単	1990年03月	日本発達心理学会第1回大会（発表論文集,p.44）	ラウンドテーブル「個の自立過程を考える」の話題提供者として、幼児集団におけるさまざまな適応戦略について報告を行った。
49.勝山ニホンザル集団における成体雄のグルーミングと性行動	単	1989年11月30日	日本心理学会第53回大会（発表論文集,p.889）	勝山ニホンザル餌付け自然集団において行なわれた８年間にわたる個体関係の観察に基づいて、６頭の成体雄と成体雌との社会的関係をグルーミングと性行動の観点から分析したもの。
50.ニホンザル餌付け自然集団における攻撃行動の分析	単	1989年07月1日	日本動物心理学会第49回大会	勝山ニホンザル餌付け自然集団において観察された1069例の敵対的個体関係を、性、年齢、血縁系順位などの個体的要因と、交尾期・非交尾期の季節的要因から分析したもの。
51.自由遊び場面における幼児の相互作用の分析（4）－行動とソシオメトリックテストとの関連－	単	1988年10月10日	日本心理学会第52回大会（発表論文集p.97）	初めて集団生活を経験する幼稚園年少組幼児を対象として、ピクチャー・ソシオメトリックテストを行い、同じクラスの仲間に対する対人認知の発達的変化について分析したもの。
52.テキサスに移植されたニホンザル（嵐山Ａ群）のグルーミング関係	単	1988年06月19日	日本動物心理学会第48回大会	1972年に京都の嵐山より米国テキサス州の半乾燥地帯に移され、約20haの放飼場で生活している嵐山Ａ群において、１年の内で最も暑い時期に当たる1983年７月から８月にかけて行った観察に基づいてグルーミング関係の分析を行ったもの。
53.自由遊び場面における幼児の相互作用の分析（3）－集団形成直後と７カ月後の比較－	単	1987年10月12日	日本心理学会第51回大会（発表論文集,p.457）	幼稚園年少組幼児を対象とした自由遊び場面における個体行動および対人行動に関する研究の第３報。ここでは、集団形成直後の４月と７ヵ月後の11月にみられた位置移動行動と遊び行動の比較を行った。
54.餌付けニホンザルの摂食行動時にみられる他個体に対する注意行動	単	1987年07月23日	日本動物心理学会第47回大会	「餌付けニホンザルの摂食行動」（第29回プリマーテス研究会）の継続研究。観察事例数を増やして、分析の精度をあげたもの。
55.設置環境の異なる２つの児童公園の利用実態の比較	単	1986年10月14日	日本心理学会第50回大会（発表論文集,p.672）	岡山県津山市にある18の児童公園の中から、設置環境の異なる２つの公園を選び、その利用実態がどのように異なるかについて、直接観察を行なうことによって検討したもの。
56.野生ニホンザル雌の出産に伴うグルーミング・ステイタスの変化	単	1986年05月23日	日本動物心理学会第46回大会	出産の前後で雌のグルーミング関係がどのように変化するかについて、グルーミング・ステイタスを指標として分析したもの。
57.自由遊び場面における幼児の相互作用の分析（2）－特に集団形成後１カ月間の行	単	1985年07月27日	日本心理学会第４９回大会（発表論文集,p.667）	幼稚園年少組を対象として、集団形成直後（４月）における個体行動の変容を、特に自由遊び場面の位置移動行動と遊び行動の面からとらえて分析したもの。

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
２．学会発表				
動変容について－				
58.ニホンザルの社会的グルーミングの行動パターンについて	単	1985年05月5日	日本動物心理学会第45回大会	勝山ニホンザル集団を対象として、非血縁雌間グルーミングの行動パターンを分析したもの。
59.餌付けニホンザルの摂食行動－特に摂食速度と注意行動について－	単	1985年03月15日	第29回プリマーテス研究会（講演抄録,p.21）	勝山ニホンザル集団を対象として、摂食行動について、性、年齢、順位を分析軸として、摂食速度、注意行動、位置移動の観点から分析したもの。
60.自由遊び場面における幼児の相互作用の分析－特に集団形成初期における敵対的行動について－	単	1984年10月14日	日本心理学会第48回大会（発表論文集,p.568）	幼稚園年少組の幼児を対象にして、特に集団形成初期における個体行動および集団構造の変容を、敵対的な相互作用の面からとらえて分析したもの。（pp.568）
61.勝山ニホンザル集団の出産資料の分析	単	1983年03月18日	第27回プリマーテス研究会（講演抄録,p.49）	餌付けニホンザル集団の個体群動態を、主として出産資料の分析によってとらえ、餌付けの進行に伴い個体群動態になんらかの変化があらわれてきているかどうかについて検討したもの。
62.攻撃行動からみたニホンザル自然集団における優劣順位関係	単	1982年05月16日	第1回基礎心理学会研究発表大会	攻撃行動を指標としてニホンザルの優劣順位関係を調べると、かなり直線的なヒエラルキーが得られることを指摘したもの。
63.ニホンザルの日周期活動性　２．勝山集団成体雄について	共	1981年07月24日	日本動物心理学会第41回大会	安藤明人・根ヶ山光一・渡辺義男 ニホンザル成体雄の日周期活動性の日内変化、季節変化を示したもの。
64.勝山ニホンザル餌付け自然集団における中心部４成体雄と成体雌との社会関係	単	1981年03月19日	第25回プリマーテス研究会（講演抄録，p.17）	雄・雌間の個体関係を、近接関係、グルーミング関係、交尾関係より分析し、個体間の“親しさ”が生起する要因を分析したもの。
65.ニホンザル自然集団におけるみなしごのグルーミング関係	単	1980年09月21日	日本動物心理学会第40回大会	幼児期に母を失ったいわゆる“みなしご”の特異的なグルーミング関係を指摘したもの。
66.勝山集団における性行動　(1) 個体関係の分析	共	1980年03月24日	第24回プリマーテス研究会（講演抄録，pp.5-6）	糸魚川直祐・安藤明人・根ヶ山光一・待田昌二 雄雌間の交尾関係の生起に関わる要因を，年齢，血縁，順位等の観点より分析した。
67.勝山ニホンザル餌付け自然集団におけるグルーミング・ステイタスの分析	単	1979年06月3日	日本動物心理学会第39回大会	グルーミング・ネットワークより、グラフ理論を用いて各個体のグルーミング・ステイタスを算出し、それが個体の優劣順位関係と有意な相関を示すことを指摘したもの。
68.勝山ニホンザル餌付け自然集団におけるグルーミング関係の分析	単	1979年04月4日	第10回比較心理懇話会	グルーミング関係の計量的研究により、母子間の親和的結合が、ニホンザル集団の親和的構造の核となっていることを指摘したもの。
69.勝山ニホンザル餌付け自然集団におけるグルーミング・ネットワークの分析（Ⅱ）	単	1979年03月23日	第23回プリマーテス研究会（講演抄録,p.4）	上記の継続研究。交尾期から非交尾期になると再びスター型の構造になることを指摘したもの。
70.勝山ニホンザル餌付け自然集団におけるグルーミング・ネットワークの分析	共	1978年03月12日	第22回プリマーテス研究会（講演抄録,p.19）	安藤明人・内藤明彦 グルーミング・ネットワークの季節的変化を示し、交尾期にスター型の構造が崩壊することを指摘したもの。
71.勝山ニホンザル餌付け自然集団におけるsupplantingの観察	単	1977年07月12日	日本動物心理学会第37回大会	サプランティングの観察により、集団の優劣順位関係の維持には劣位個体の役割が大きいことを指摘したもの。
３．総説				
1.動機づけ	共	2013年12月11日	藤永保監修『最新心理学事典』平凡社	赤井誠生との共著。pp.548-551
４．芸術（建築模型等含む）・スポーツ分野の業績				
５．報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等				

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
５．報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等				
1.ヒトとモノとの関係からヒトとヒトの関係を考える	単	2018年11月28日	武庫川女子大学附属総合ミュージアム 2018年度秋期展覧会シンポジウム	シンポジウムにおける話題提供
2.ヒトとモノとの密やかな関係－関係構築・維持のツールとしての「粗品」」	単	2018年10月17日	『粗品？ 粗品！時代の空気感を映す』 武庫川女子大学附属総合ミュージアム 2018年度秋期展覧会図録	
3.科学と社会を結ぶトランスサイエンスの時代－学協会のこれから－（話題提供：高橋克忠）	単	2015年9月1日	日本防菌防黴学会第42回年次大会	標記特別講演のコメンテーター
4.子どもの経済的社会化に関する実証的研究	単	2003年03月31日	平成13～平成14年度科学研究費補助金 基盤研究(C)(2) 研究成果報告書（課題番号13610177）	小学生と大学生を対象として，経済事象に関する知識・スキルの発達を年齢横断的に分析することにより，子どもの経済的社会化のプロセスの心理学的理解を深めることを目的として，科学研究費補助金を受けて行われた研究の報告書。
5.幼児のコントロール欲求の発達に関する実験的研究	単	1997年03月31日	平成7・8年度文部省科学研究費補助金（基盤研究Ｃ）研究成果報告書	幼稚園幼児におけるコントロール欲求(desire for control)の発達過程を明らかにするために，スキル課題（輪投げ）とチャンス課題（くじ引き）における予測行動と遂行行動を観察し，予測行動に見られる個人差（性差，年齢差），および予測行動と遂行行動との関連について検討した。
6.女の人生すごろく		1997年	冨士谷あつ子・伊藤公雄（編著）『女が変わる男が変わる100冊の本』かもがわ出版	
7.女たちが変えるアメリカ		1997年	冨士谷あつ子・伊藤公雄（編著）『女が変わる男が変わる100冊の本』かもがわ出版	
8.ハーバードの女たち		1997年	冨士谷あつ子・伊藤公雄（編著）『女が変わる男が変わる100冊の本』かもがわ出版	
9.男だって子育て		1997年	冨士谷あつ子・伊藤公雄（編著）『女が変わる男が変わる100冊の本』かもがわ出版	
10.子育てがいやになるときつらいとき		1997年	冨士谷あつ子・伊藤公雄（編著）『女が変わる男が変わる100冊の本』かもがわ出版	
11.オスとメス＝性の不思議	単	1997年	冨士谷あつ子・伊藤公雄（編著）『女が変わる男が変わる100冊の本』かもがわ出版	
12.「家族」という名の孤独	単	1997年	冨士谷あつ子・伊藤公雄（編著）	

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
５．報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等				
13.愛はなぜ終わるのか		1997年	『女が変わる男が変わる100冊の本』かもがわ出版 冨士谷あつ子・伊藤公雄（編著）	
14.発達心理学とフェミニズム		1997年	『女が変わる男が変わる100冊の本』かもがわ出版 冨士谷あつ子・伊藤公雄（編著）	
15.感情心理学	共	1997年	ナカニシヤ出版	
16.動物の子育て		1992年	平山諭・鈴木隆男編著『発達心理学の基礎Ｉ－ライフサイクル』ミネルヴァ書房	
17.イニシエーションとしての心理学実験		1992年	人間学研究第８号　武庫川女子大学人間学研究会	
18.青少年の社会参加をめざす青少年施策のありかたについて－ユース・ネットワークの提唱－		1992年	人間学研究第７号　武庫川女子大学人間学研究会	
19.マイ・ホームカミング・デイ		1992年	人間学研究第６号　武庫川女子大学人間学研究会	
20.自明性の体系としての文化における個人の問題		1992年	人間学研究第４号　武庫川女子大学人間学研究会	
21.「教養」ってなんだ－Ｋ君のこと		1992年	人間学研究第２号　武庫川女子大学人間学研究会	
６．研究費の取得状況				
1.標準的経済学に対するアノマリーの代替的説明としての心理学的接近の可能性の検討	単	2009年	萌芽研究　継続	
2.標準的経済学に対するアノマリーの代替的説明としての心理学的接近の可能性の検討	単	2008年	萌芽研究　継続	
3.標準的経済学に対するアノマリーの代替的説明としての心理学的接近の可能性の検討	単	2007年	萌芽研究　新規	
4.新規企業の社訓・社是が企業の行動に及ぼす影響過程に関する実証的研究	共	2006年	企業家研究フォーラム研究助成金A（大阪商工会議所）	
5.期待効用理論によらない非合理的な行動を支える心理機制に	単	2005年	基盤研究（Ｃ）継続	

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
６．研究費の取得状況				
関する実証的研究				
6.期待効用理論によらない非合理的な行動を支える心理機制に関する実証的研究	単	2004年	基盤研究（Ｃ）新規	
7.子どもの経済的社会化に関する実証的研究	単	2002年	基盤研究(C)(2)継続	
8.子どもの経済的社会化に関する実証的研究	単	2001年	基盤研究(C)(2) 新規	
9.青年のギャンブリング行動に関する実証的研究	単	1997年	基盤研究(C)(2) 新規	
10.幼児のコントロール欲求の発達に関する実験的研究	単	1996年	基盤研究(C)(2)継続	
11.幼児のコントロール欲求の発達に関する実験的研究	単	1995年	基盤研究(C)(2) 新規	
12.青年の規範意識に関する社会心理学的研究	単	1994年	上廣倫理財団　新規	
13.ソーシャル・サポートのストレス緩衝効果に関する健康心理学的研究	単	1991年	奨励A	
14.大学生の規範意識と社会的自己に関する社会心理学的研究	単	1989年	上月教育財団	
15.資源獲得のために協力を必要とする事態における幼児の対人調整能力に関する研究	単	1989年	奨励A	
16.児童公園における幼児・児童の遊びに関する比較行動学的・環境心理学的研究	単	1984年	トヨタ財団　第Ｉ種研究　個人奨励研究	

学会及び社会における活動等	
年月日	事項
	International Society for the Study of Behavioural Development Society for Resarch in Child Development 日本社会心理学会 日本発達心理学会 日本教育心理学会 日本心理学会